

2017年12月24日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「暗闇に光を」

聖書:マタイによる福音書2:1～12

「東の方から来た占星術の学者」とは、ユダヤ人からすれば外国人である。彼らは、星を観察する天文学者であり、またこの世の政治的状況、国々の情勢を研究し、国が、この世がどこに向かうのかと予測する学者である。

この時、「エルサレムへ行き…ユダヤ人の王としてお生まれになった」キリストを捜しに来たわけである。「エルサレム」は、ユダヤの中心地、当然、キリスト研究は盛んである。しかし、ここにきて外国人に「キリスト誕生」の知らせを聞いたわけだ。マタイは、《これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった》と記す。

王も、エルサレムの人々も「不安」を抱く。何にか？ヘロデ王は自分の地位が脅かされると不安を抱く。キリストの誕生が自分のことの“救い”とはならなかった。キリストの誕生が他人事、いや、邪魔者として捉えてしまった。ゆえにキリストが生まれたとされるベツレヘムに軍隊を送り、その地域一帯にいる2歳以下の男の子を、一人残らず殺させた(2:16)。エルサレムの人々の「不安」は、自分たちが考えおよばなかったところでキリスト誕生の知らせを受けたことであろう。さらには、「東の方から来た占星術の学者」も「不安」はあつたはずだ。星を目当てに旅をするとはいえ、何日も歩く中での不安は隠せない。ゆえに苦し紛れにヘロデ王にまで会うことになった。

私たちの歩みの中にも、不安(暗闇)は付きもの。不安は何度もおとずれる。苦しみや悲しみは、無くなることはない。この12月に入り、城間祥介牧師を天に見送るという思いがけない出来事があり、もう少し元気でいて欲しいと願っていたところに悲しい知らせがあつた。その悲しみに向き合うことを妨げるかのように緑ヶ丘保育園に起きた「米軍ヘリからの落下物事故」。不安と悲しみが同時に襲って来た12月…。

しかしクリスマスは、私たちがどうしてもぬぐうことの出来ない暗闇に「光」を灯してくれた出来事であり、不安や悲しみ、苦しみの中に、希望を灯してくださる神の御業である。この月にクリスマスの恵み、慰めが待ち構えていたことに、不思議な思いがする。この私たちの世界に、神の子、イエス・キリストの誕生の出来事がある事に希望を覚えたい。(神谷)